HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	炭鉱におけるサークル運動の展開 ： 文学サークルを中心に（前）
Author(s)	水溜, 真由美
Citation	国語国文研究, 133, 31-42
Issue Date	2007-12-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93367
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_133-31-42.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

炭鉱におけるサークル運動の展開
――文学サークルを中心に（前）

水溜真由美

一　はじめに

一九五〇年代、革新運動の全国的な盛り上がりを背景として、草の根的な広がりを持つサークル運動がさかんになった。近年、五〇年代における文化・社会に対する関心が高まる中で、サークル運動についても少しずつ研究が進められつつあるが、その全貌は未だ明らかにされているとは言い難い。

筆者は、かつて本誌に掲載された「一九五〇年代後半のサークル運動と小集団論」[*1]において五〇年代後半のサークル論を検討したが、同時代のサークル運動そのものについては先行研究に依拠してごく簡単なアウトラインを示すに留まった。本稿では、一九五〇年代に炭鉱を中心に展開されたサークル運動について詳しい検討を行いたい。

そもそも、一二八号掲載の論考は筆者がかねてから取り組んでいる『サークル村』研究の一環をなすもので、二〇〇五年に東京大学大学院総合文化研究科に提出した博士学位論文「『サークル村』と森崎和江――戦後日本における「連帯の思想」の一系譜」の一部に加筆修正を施して発表したものである。筆者は博士論文提出後、博士論文では十分に論じ得なかった一九五〇年代における炭鉱周辺のサークル運動に関する研究に集中的に取り組んできた。筆者が、五〇年代における炭鉱のサークル運動に着目する理由は複数ある。

第一に、筆者の中心的な研究対象である『サークル村』の運動との関連である。[*2]『サークル村』とは、一九五八年九月より九州サークル研究会によって創刊された月刊雑誌の名称であるが、この雑誌は谷川雁、森崎和江、上野英信ら九州を拠点として活躍した著名な作家たちが編集委員を務めたことでも知られる。『サークル村』の運動は、その名称が示す通り当時全国各地で展開されていたサークル運動の一つであると同時に、九州六県および山口県における様々なサークル間の交流を深めることを主な目的として開始された。

当時、炭鉱の職場サークルは、九州北部および山口県におけるサークル運動の主要な勢力の一つであり、とりわけ、『サークル村』の事務局が置かれた中間市は、隣接する水巻町と並んで、大正鉱業・九州採炭・日本炭鉱などが経営する炭坑がひしめく筑豊炭田有数の炭鉱町であった。その結果、ほぼ必然的に、炭鉱は『サークル村』における特権的な空間となった。

このことは、『サークル村』誌上に、炭鉱をテーマとする、あるいは炭鉱労働者自身による文章や作品が多数取り上げられたことに加えて、この時期に森崎和江や上野英信が炭鉱を中心的なテーマとして作家活動を行ったことや、『サークル村』の運動が炭鉱の合理化反対闘争の盛り上がりの中で急速に政治運動に吸収されていったことからも裏づけられる。というより、むしろ傑出したオルガナイザーであった谷川雁が九州北部および山口県における炭鉱の職場サークル運動の盛り上がりとそのネットワークの存在に目をつけて、中間市を戦略的な拠点として選びながら、『サークル村』というユニークな運動を仕掛けていったということが正しいだろう。

いずれにせよ、『サークル村』の運動の背景となり基盤となった九州方面における炭鉱のサークル運動の状況を明らかにすることは、『サークル村』を同時代の広汎なコンテクストの中に位置づけながら、その意義と可能性を再検討・再評価しようとする筆者の研究の趣旨に照らして回避できない作業である。

第二に、一九五〇年代における職場サークルの一例としての関心である。小規模の対面集団であるサークルは、その性格上身近な人間関係を仲立ちにして組織されるのが通例であったが、職場の仲間関係がベースとなるケースも珍しくなかった。現在、筆者は職場サークルに着目することによって、五〇年代における政治と文化の興味深い関係性を浮かび上がらせる視座を得られるのではないかという見通しを持っている。

しかしながら、これまで職場サークルの特色や存在意義について本格的な検討は行われて来なかった。[*3] その背景として、従来のサークル研究が、個々のサークルを政治的な理念や政党や労働組合などの制度的な組織から自立したユニークな小宇宙として描き、それらの運動を六〇年代以降に開花する市民運動の先駆として評価する傾向が強かったことが指摘できる。[*4] もちろん、こうした理解は誤りというわけではないが、少なくとも職場サークルに関する限り、一面的であると言わざるを得ない。しばしば、職場サークルは労働組合と密接な関係を持ち、労働組合運動の理念を共有しながらサークル活動を展開した。このことは、職場サークルの運動が、多くの場合総評の中核をなす産業別組合を擁する産業部門において活発であったことからも裏書きされる。

石炭産業は、当時労働組合運動とサークル運動が最も盛んであった産業部門の一つである。日本炭鉱労働組合（炭労）は、国鉄労働組合と並んで総評を構成する主要単産の一つであり、炭鉱におけるサークル運動は炭労の盛衰と軌を一にしていたと言っても過言ではない。第二節以下で明らかにするように、炭労は五〇年代半ばに『月刊炭労』を文化誌に衣替えしたほか、文芸コンクールの開催や山元への講師の派遣などサークル運動を活性化するために様々なバックアップを行った。他方で、サークルは炭鉱労働者の仲間意識を強め、

労働者を横断的に結びつけるユニークな回路を作り出すことによって、労働組合運動に独自の貢献を行った。

なお、このようなサークルと労働組合の双方向的な関係性は、炭鉱労働者に限定されるものではなく、他の産業部門においても確認できる。その一例として、国鉄労働組合発行の『国鉄文化』、全逓信従業組合発行の『全逓文化』、全国電気通信労働組合発行の『全電通文化』など、『月刊炭労』と類似した性格を持つ文化誌が、左派系の主要単産によって発行されていたことを指摘することができる。また五五年になると総評のバックアップの下で国民文化会議が設立されるが、各産業部門において積み上げられたサークルネットワークは、その存立基盤の一つとなった。さらに、五〇年代後半の革新陣営における総評と国民文化会議の協力関係は、各産業部門における労働組合とサークルのそれを全国レベルで反復する意味を持つものであった。

いささか先回りして総括的な記述を行ってしまったが、各職場、各産業部門、あるいは全国レベルにおける職場サークルと労働組合の関係性は地道なケーススタディによって丁寧に論証される必要がある。とりあえず本稿では、炭鉱における職場サークルに焦点を合わせ、労働組合との関係にも着目しながら、五〇年代における職場サークルの運動の一端を明らかにしたいと考える。

ただし炭鉱におけるサークル運動といっても、本稿ではとくに文学サークルの運動に力点をおいて議論を進めたい。その理由は、第一に、文学サークルの運動は『サークル村』の運動ともっとも大きな接点を持っていたためである。第二に、文学サークルの運動は、職場外の文学サークルと広汎なネットワークを形成したことや、職場内で様々なジャンルのサークルの結節点に位置したことなど、極めてユニークな特徴を持っていたためである。第三に、サークル誌の形で記録が残される文学サークルの運動には、他のジャンルに比べると資料が豊富であるという研究上の利点も存在する。うたごえ運動など他のジャンルの運動については、更なる調査を進めた上で別の機会に詳しく検討したいと考える。

二　炭鉱における文化運動と職場サークル

（一）炭鉱における文化活動とその背景

炭鉱労働者と文化活動。――今で言うところの三K労働に従事した炭鉱労働者の人口に膾炙したイメージを前提するならば、両者の組み合わせはやや意外な印象を与えるだろう。だが現実に、戦後の炭鉱では文化活動がさかんであった。まずはこのことを裏書きするような事象を、いくつか取り上げてみたい。

その一。一九五〇年代初頭に北海道の炭鉱を舞台とした映画『女ひとり大地を行く』[*5]が制作された。『女ひとり大地を行く』は、東宝争議後に独立プロで活躍した亀井文夫が監督を、山田五十鈴が主人公の女坑夫を演じた映画であるが、一般の商業映画とは異なり、道炭労（日本炭鉱労働組合北海道地方本部）がキヌタ・プロと共同で制作を担った[*6]。ロケも、労働組合の協力の下、夕張炭鉱、太平洋炭鉱、雄別炭鉱、別保炭鉱など各地の炭鉱を舞台に行われ、炭鉱労働者やその家族が多数エキストラとして参加した[*7]。さらに、脚本担当

者には、雄別炭鉱の文学サークル『火山脈』のメンバーであった石田政治も名を連ねている。[*8]

その二。戦後最大の労働争議であった三池争議の際、三池炭鉱の労働者と各地の炭鉱から支援に駆けつけた労働者は、歌を歌って団結を固め闘争心を鼓舞しあった。とりわけ、「がんばろう　つきあげる空に　くろがねの男のこぶしがある　もえあがる女のこぶしがある　闘いはここから　闘いはいまから」という威勢の良い歌詞を持つ「がんばろう」の歌は、三池争議のシンボルとなった。[*9]「がんばろう」の作詞者は三菱上山田炭鉱の文学サークルのメンバーであった森田ヤエ子、作曲者は三池製作所の合唱団のリーダーであった荒木栄である。[*10]うたごえ運動は五〇年代におけるサークル運動の中でも最も大規模かつ活発に運動が展開されたジャンルであり、全国、あるいは地域単位の祭典が頻繁に開催されたほか、炭鉱においては労働者自らが労働歌の作詞・作曲に熱心に取り組んだ。宇部興産東見初炭鉱の花田克己が、三池争議の応援に出かけた際、東見初炭鉱労働組合の代表としてよりも、すでに労働者たちに愛唱されていた「炭鉱の娘」の作詞者として紹介されたというエピソードは、[*11]同じ炭鉱の仲間が制作した労働歌に対する労働者たちの愛着を示している。

その三。炭鉱は優れた芸術家を生んだ。その一人である千田梅二は、筑豊の日本炭鉱高松一坑の炭鉱労働者であり、『サークル村』の表紙を飾った画家としても知られる。[*12]千田の作品の多くは版画であるが、彼の版画の粗い彫りと墨の単色刷りは、炭鉱および炭鉱労働者を表現する上で素晴らしい効果を生み出した。だが、千田が版画という表現方法を選んだそもそもの理由は審美的なものではなく、版画がサークル誌の表紙や挿絵を量産する上で好都合だったためである。五三から五五年にかけて、千田は日炭高松で上野英信と共に『地下戦線』などのサークル誌を発行したり、「せんぷりせんじが笑った」や「ひとくわぼり」などのえばなしを制作したりして、読者となった職場の労働者の喝采を浴びた。

他方で、多くの炭鉱では美術サークルの活動も活発だった。北海道では、サークルを拠点とする芸術活動の広がりを背景として、一九四七年以降毎年道炭労と道鉱連（北海道石炭鉱業連盟）の共催により「炭鉱絵画展」が開催されていた。

ところで、戦後の炭鉱で文化運動がさかんになった理由は何であろうか。戦後の民主化の気運が広汎な社会階層を巻き込んで文化運動を活発化させたことはもちろんであるが、炭鉱固有の事情として、戦後に炭鉱に従事する労働者の出身階層が変化したことが挙げられる。

戦前においては、炭鉱の坑内労働者はほぼ例外なく底辺層の出身であった。その背景として、炭鉱における劣悪な労働条件や根強い差別意識に加えて、労働運動を警戒した経営者が高学歴の労働者の採用を忌避したことが指摘できる。ところが、戦後においては事情が若干変化した。とりわけ戦後直後、朝鮮人・中国人など植民地の被支配民族の去った石炭産業では深刻な労働力不足が生じ、当初基幹産業として国家の手厚い保護を受けた石炭産業には、職にあぶれた引き揚げ者・復員者など多様なバックグラウンドを持つ労働力が流れ込んだ。その結果、より高い学歴を持つ労働者が炭鉱労働に従事するようになった。労働争議調査委員会編著『石炭争議（戦後労

働争議実態調査　第一巻』[*13]に掲載されたデータによると、昭和八年の時点では小学校卒が炭鉱労働者の多数を占めていたのに対し、昭和二二年には高等小学校卒が多数派となっている。また、「中学中退以上」の学歴を持つ者も、一、七パーセントから、一二、七パーセントに増加している。

さらに、多くの人々が職業難に喘いでいた戦後直後、増産体制を敷いた炭鉱が多様な労働力を吸収したことは、外部の文化を炭鉱に移植する契機にもなった。たとえば雄別炭鉱の文学サークル『火山脈』の立ち上げに関わった関谷文雄や、同じく『火山脈』の中心メンバーであった石田政治らは、戦後に職を求めて来道した東京出身者である。『火山脈』が『新日本文学』の読者の会からスタートしたことからも推測できるように、戦後の雄別炭鉱における文化運動の開始は中央の文化の移入と密接に結びついていた。[*14]また、大正鉱業においてうたごえサークルや文学サークルの運動にコミットした小日向哲也も東京出身者で、戦後に親戚の縁故で大正鉱業に就職した。なお、就職時に高等小学校卒であった小日向は、後に仕事の傍ら直方の定時制高校に通学したが、一学年約二百名の生徒のうち、ほとんどは炭鉱労働者であったという。[*15]ちなみに、筆者が聞き取りを行ったサークル運動家の中には就職の時点で高等学校卒業の学歴を持つ者も複数存在した。

（二）サークル運動と政治組織

サークル運動は、戦前に共産主義者によって開始された文化運動であるが、ファシズムと戦争によって中断を余儀なくされた。戦後のサークル運動は、戦前に中断された運動を再開する意味を持ちつつも、民主化を背景とする広汎な文化運動の流れと混じり合いながら発展した。こうした背景から、サークル運動は政治に傾斜し、政治組織と密接な関わりを持つことになった。

戦後のサークル運動は、戦後直後の興隆期を経た後レッド・パージによって一時下火になった。それからわずか数年の内にサークル運動は再生したものの、レッド・パージ前後の第一期と第二期でサークルの性格は大きく変化したと言われる。第一期のサークル運動は、共産党の主導による政治主義的な色彩の濃い運動であったが、第二期になると、あからさまな政治主義は後景化して、大衆の自発性・内発性が尊重されるようになった。生活記録運動やうたごえ運動が急速に広がったことも、この時期のサークル運動の特徴であった。

レッド・パージ前後のサークル運動の変容は、左翼運動内部における党派間のヘゲモニーの移り変わりと密接に関わっている。とりわけ注目すべき動きは、労働組合の再編と共産党の求心力の低下である。周知のように、一九五〇年には共産党の主導する全労連（全国労働組合連絡協議会）が解散に追い込まれる一方で、新たに総評が発足した。当初ＧＨＱの肝煎りによって結成された総評は朝鮮戦争の勃発によって左旋回を遂げ、以後総評は社会党左派との強力な結びつきを保持しながら革新国民運動の中核を担う組織へと成長した。他方で、レッド・パージに代表される占領軍による激しい弾圧、コミンテルンの共産党批判とその後の混乱、政治主義的な引き回しに対する批判は、共産党の影響力を低下させた。

ほぼ同時期に炭鉱の労働運動にも大きな再編の動きが生じた。一

九四九年三月に共産党が主導する全日本石炭産業労働組合（全石炭）が解散し、傘下の組合は一斉に炭労に加入した。以後、炭鉱における労働運動の主導権は社会党系の炭労に一元化されることになった。[16] よく知られているように、炭労は総評所属の主要単産の一つとして、五〇年代の革新運動において大きな存在感を示すことになる。他方で、レッド・パージは共産党系の労働組合運動家・サークル運動家を職場から追放し、炭鉱の労働組合運動に大きな打撃を与えると共に共産党の勢力を弱めることになった。[17]

とはいえ、五〇年代において革新運動に占める共産党のプレゼンスは単線的に縮小したわけではない。共産党は内部抗争により国会の議席をほとんど失った五〇年代前半においてさえも、サークル運動の中核であったうたごえ運動では中心的な役割を果たした。[18] ある意味で、共産党は政治における影響力の低下を文化運動のレベルで補ったということもできる。このことを可能にした条件として、共産党が、五〇年代の運動を方向付けた大衆路線を率先して受け入れるなど、路線転換を図ったことも指摘できる。

さて、右に述べた労働組合運動の再編成の動きや政党間の力関係の変化は、炭鉱のサークル運動にどの程度の影響を与えたのだろうか。本稿では第一期の運動については議論を差し控えるが、レッド・パージがサークル運動に相当の打撃を与えたことは間違いない。レッド・パージよって主要メンバーを失ったサークルが少なくない上に、[19] 政治的な言動を控える雰囲気が蔓延するなど、レッド・パージ以後サークル運動は質的にも大きく変化したようである。[20]

とはいえ、第二期においても、サークルには政治意識の強い組合員が集まる傾向が顕著であった。たとえば、太平洋炭鉱労働組合発行の文化誌『響土』第四号（一九五三年二月）には、「初期の文化サークルは、余りにも幼稚だった為に、盛んな労働組合活動について行けなかった。然し三年、五年とサークルが成長するにつれて、逆に労働組合活動は丁度後退期に入ったため、文化サークルが組合活動に先行し、往年の立場が逆になって了った」という興味深い記述がある。また、総評教育文化全国研究集会における炭労本部の報告「炭鉱労働者の文化活動とその問題点」には、「サークルは組合活動家の養成所みたいなところである」という発言が見られる。[21]

おそらくはそのことと連動して、共産党員は間違いなくサークル運動の重要な一翼を担った。たとえば、北炭夕張炭鉱ではサークル運動に熱心なメンバーの二分の一から三分の二程度は共産党員で、とりわけ学習サークルでは共産党の勢力が圧倒的であったという。[22] 筆者の知る限りでも、名前の知られた文学サークルの主要メンバーの中には、かなりの割合で共産党員が含まれていた。

とはいっても、筆者が聞き取りを行った限りでは、共産党が各々のサークルに介入しようとした形跡はないし、また、党籍を持つメンバーが、サークル内部に党派的な論理を持ち込むようなこともなかったようである。所によっては党員と非党員の間にある種の溝も存在したようだが、五〇年代においては、「左翼的」な政治意識を持つ末端の労働者にとって、政党の違いはそれほど大きな意味をもたらさなかったように思われる。

他方で、サークル運動に対して強力なバックアップを行った炭労も、共産党系の運動家を非共産党系の運動家と対等に扱った。その

背景として、当時、共産党主導の文化運動と総評主導の労働運動の間に、公認された結びつきが存在したことを指摘することもできる。たとえば、一九五四年に総評の事務局長高野実は、日本のうたごえ委員会実行委員長であった関鑑子に提携の申し入れを行っている。[*23] 即ち、五〇年代の炭鉱のサークル運動において、共産党と社会党は平和的な協力関係を築いていたと言うことができるだろう。[*24]

なお、労働組合とサークルとの関係についてはより詳細な検討が必要である。この点については、本節第四項以降で触れることにしたい。

（三）サークル運動の盛衰

炭鉱におけるサークル運動の盛衰は、各々の炭鉱やサークルによって微妙に異なっている。しかし、炭鉱全体で考えると、一九五四、五年頃にサークル運動は一層拡大し活性化したように思われる。その一つの証として、五四年に炭労の機関誌であった『月刊炭労』が雑誌の性格を大きく変化させたことが指摘できる。『月刊炭労』は、元々『調査半月報』という名称の資料雑誌としてスタートし、[*25] 誌上には主に石炭産業を取り巻く情勢の分析や統計資料が掲載されていた。ところが、『月刊炭労』は、第五三号（一九五四年六月）より「学習雑誌」であることを宣言して誌面を一新し、急速にサークル運動・文化活動をリードする媒体へと変貌を遂げていった。[*26]

なお、炭労は『月刊炭労』とは別に、旬刊の機関誌『炭労新聞』を発行しており、『月刊炭労』が誌面を一新する以前から、誌上で組合員の文化活動について紹介を行ってはいた。ただ、『炭労新聞』に関しても、一九五四年半ば頃から、うたごえ運動を中心にサークル運動に関する記事が顕著に増え始めた。

この頃創刊された文学サークル誌も少なくない。たとえば、宇部興産東見初炭鉱の文学サークル誌『まきやぐら』の創刊は五四年五月、幌内炭鉱の歯車文学会による『歯車』の創刊は五四年六月、福岡県山田市周辺の炭鉱労働者による文学サークル誌『山田文学』[*27]の創刊は五四年五月である。さらに、三菱美唄炭鉱では、『炭炎』を発行していた文学サークルの発案により、五四年から「炭鉱の生活史」の編纂運動が開始されている。[*28]

そもそも五四、五年頃は全国的に見てもサークル運動の最盛期であり、全国的な運動の盛り上がりは炭鉱の運動にも大きな影響を与えた。

もっとも顕著な動きはうたごえ運動である。中央合唱団が全国祭典「日本のうたごえ」を開始するのは一九五三年であるが、その参加者は、六千名（五三年）、二万五千名（五四年）、四万名（五五年）と、増加の一途をたどった。こうした動きと連動して、五三年以降、各地・各産業部門において頻繁にうたごえ祭典が開催され、各地・各職場にうたごえサークルが簇生した。

ほぼ同時期に、炭鉱におけるうたごえ運動も活発化している。炭鉱からの「日本のうたごえ」への参加者が、一名（五三年）、四六名（五四年）、二百数十名（五五年）と急速に増加しているほか、[*29] 五五年三月には美唄において初の「炭鉱のうたごえ」が開催されている。この頃、各炭鉱ではうたごえサークルが続々と組織されていた。一例を挙げると、五四年四月に発足した大正鉱業の中鶴青空コーラス

は、五四年九月に開催された「九州のうたごえ」や、北九州や筑豊における様々な「うたう会」の活動から刺激を受けながら、急速に発展を遂げたという。[*30]

また、同じ頃生活綴り方運動・生活記録運動も炭鉱に波及している。東亜紡織泊工場の女子工員による生活記録『母の歴史』が出版されるのは一九五四年だが、炭鉱でもほぼ同じ頃に、夕張炭鉱や太平洋炭鉱の主婦が生活綴り方運動を開始し、『あゆみ』、『母のうぶごえ』などの文集を相次いで発行している。[*31] また、雄別炭鉱の『火山脈』では、第二八号（一九五四年九月）、第二九号（一九五四年一二月）において石田政治が生活記録の提唱を行っており、第三一号（一九五五年七月）では生活記録の特集が組まれている。[*32]

他方で、炭鉱全体においてサークル運動が衰退した時期については、ほとんど議論の余地がない。エネルギー革命のあおりによる急激な合理化と反合理化闘争の本格化は、炭鉱における文化活動・サークル運動の息の根を止めた。『月刊炭労』が一九六〇年四月（一一七号）で前触れなしに終刊したことが示すように、三池争議はその大きな転機となった。

（四）職場サークルの実態

次に、職場サークルのジャンル、規模、メンバーの構成、財源等を見てみたい。

まず、炭鉱にはどのようなジャンルのサークルが存在していたのだろうか。一九五五年に炭労教宣部が、炭労傘下の労働組合・職員組合を対象として行った調査によれば、[*33] この時期の炭鉱では、「社研または読書」、「文学」（創作・詩・短歌・俳句に分類）、「音楽」（ブラスバンド・合唱隊に分類）、「演劇（含人形劇）」、「映画」、「舞踊」（洋舞・日本舞踊・その他に分類）、「幻灯または紙芝居」、「写真」、「美術」、「娯楽」、「スポーツその他」の各々のジャンルについて、一定数のサークルが組織されていた。中でも、突出して該当数が多かったジャンルは、「合唱隊」、すなわちうたごえサークルであり、第二位が「ブラスバンド」と「写真」、次いで「演劇」である。かつての文学サークルのメンバーを中心とした筆者の聞き取りでは、文学サークルのほか、うたごえサークル、演劇サークルについて耳にすることが多かった。サークルの具体的な活動内容については分野毎に異なるためここでは詳述しないが、筆者の聞き取りによれば、標準的な活動の頻度は週一回程度であったようである。

炭労教宣部の調査によれば、サークルの標準的な会員数は二〇名から二五名程度。サークル運動の参加者は労働者全体から見ると少数派であったが、複数のサークルに重複して所属したメンバーも少なくなかったようである。

炭労教宣部は調査結果をふまえた上で、「社研サークルでは職場サークルが断然多く、その他の大部分のサークルでは地域サークルの傾向が目立ち、娯楽サークル、スポーツ関係サークルでは労、職、会社側の三者によって構成されているところが多いように見受けられる」という分析を行っている。[*34] たしかに、サークルのメンバーの構成は多様であり職場の枠を越える場合も少なくなかったようである。ただし、通常、炭鉱町は一種の企業城下町を形成し、炭鉱労働者は社宅に集住していたため、炭鉱では「職場」と「地域」が未分

化といって良いほど密接な関係にあったことにも留意すべきだろう。

次に、サークルの財政について述べる。まず、九州の文学サークルの活動費の財源について言及した文学サークル代表者会議の報告文を参照したい。[*35] この報告文によると、三菱上山田炭鉱の文学サークル（『山田文学』）の活動経費は全額組合負担、日炭高松（『文芸誌たかまつ』）も全額組合負担、大正鉱業（『裸像』）は一部組合負担である。他方で、三池炭鉱は、会社が支出する文化費四四万円（年間）を、組合の決定に応じてサークル間で分割する方式であった。ただし、四つの文学サークルはいずれも財政難に悩んでいるという報告を行っており、資金は潤沢ではなかったようである。また、筆者が聞き取りを行った文学サークルの活動経費は、北炭夕張（『群鴉』）が組合の援助と会社の厚生費、宇部興産東見初（『まきやぐら』）が組合負担、雄別（『火山脈』）は一部組合負担であった。炭労教宣部の調査も、組合の補助と会社の厚生費がサークルの主要な財源であったことを示している。[*36]

多くのサークルが、財政的に労働組合をバックアップしていたとする右の事実は、インフォーマルなグループとしてのサークル像に部分的な修正を迫るものであろう。もちろん、だからといって、サークルを労働組合の従属物としてイメージすることは妥当ではない。通常、サークルの組織化は自然発生的であったし、組織の運営や活動内容について、サークルは高度の自由を保持していた。しかしサークルの組合からの自立が五〇年代後半のサークル論の一つの大きなテーマになっていたことが示すように、労働組合とサークルの間には無視し得ない緊張関係も介在していた。[*37]

他方で、会社による支援についてはどうだろうか。聞き取りでは、会社がサークルに対して「アカ」や「共産党」といったレッテルを貼り、サークルに強い圧力をかけたというようなエピソードを頻繁に耳にした。ただしその方法は、たとえば解雇をちらつかせるようなやり方であって、サークルに対する財政的な支援を打ち切るというようなレベルのものではなかった。先に触れた三池炭鉱の例が示すように、通常、会社の支出する厚生費の使途を決定する権限は組合に属していたように思われる。

他方で、（文化系の）サークル運動は、労働者が経営者に対して一定の勢力を確保し得た職場でのみ許容され得たことも認識しておかなくてはならない。というのは、多くの経営者はサークル運動を左翼運動の温床として強く警戒したからである。たとえば、レッド・パージ後労働組合が完全に企業内化されていた三菱化成では、職場サークルは、五〇年代にはもはや存立の余地を持たなかった。[*38] その意味でも、炭鉱におけるサークル運動は、強力な労働組合の存在を背景として可能になったと言える。

＊1　第一二八号、二〇〇五年八月。

＊2　公表されている主な研究成果としては、前述の博士論文に加えて、「同化型共同性の拒絶――森崎和江と炭坑」『思想』第九三一号、二〇〇一年一一月、「全国交流誌と「サークル村」」『第Ⅲ期　サークル村』第五号、二〇〇四年、「森崎和江と『サークル村』――一九六〇年前後の九州におけるリブの胎動」『思想』

第九八〇号、二〇〇五年一二月がある。

＊3　本稿を脱稿後、『現代思想』の臨時増刊号「総特集　戦後民衆精神史」が刊行された（第三五巻第一七号、二〇〇七年一二月）。この特集は、道場親信「下丸子文化集団とその時代―五〇年代東京南部サークル運動研究序説」を始めとして、中小工場の労働者によって担われた東京南部におけるサークル運動に焦点を合わせたものであり、一九五〇年代における職場サークルの運動に関する研究を大きく進展させるものと評価できる。

＊4　こうした傾向は、サークル運動に関する主な先行研究である、思想の科学研究会編『共同研究　集団』平凡社、一九七六年、天野正子『「つきあい」の戦後史――サークル・ネットワークの拓く地平』吉川弘文館、二〇〇五年においても確認できる。

＊5　公開は一九五三年。

＊6　一九四〇年代にも、炭労は映画制作を試みている。「炭労映画「起き上る労働者」九ヶ月振りで完成」（『炭労』一九四九年三月七日）を参照。また、全逓の制作による『赤い自転車』（一九五三年）など、ほぼ同時期に他の産業部門における労働組合も職場を舞台とする映画を制作している。

＊7　「女ひとり大地を行く撮影ニュース」『炭労新聞』一九五二年一〇月二日、一一月一一日。

＊8　「美しき女坑夫の一生（仮題）」『炭労新聞』一九五二年九月二一日。映画のクレジットタイトルでは、「脚本　新藤兼人　千明茂雄」の脇に「協力　職場作家」とのみ記されている。

＊9　花園憲一「がんばろうの歌」『炭労　激闘あの日あの時』日本炭鉱労働組合、一九九二年。

＊10　「がんばろう」が制作された経緯については、森田ヤエ子『この勝利ひびけとどろけ――荒木栄の生涯』大月書店、一九八三年を参照。

＊11　花田克己氏の聞き取りより（二〇〇六年九月二九日）。なお「炭鉱の娘」の作曲者は、日鉄二瀬の労働者玉置利雄である。

＊12　千田梅二については、田川市美術館等で幾度か展覧会が開催されている。最近の展覧会の図録である『千田梅二・炭鉱のくらやみの唄』田川市美術館、二〇〇六年から千田の生涯と画業をだどることができる。また、日炭高松のサークルの運動は、千田と同じく版画を得意とする画家の上田博も生み出した。

＊13　中央公論社、一九五七年、三五頁。

＊14　岩崎栄則氏への聞き取りより（二〇〇六年一〇月二八日）。『火山脈』創刊の経緯については、関谷文雄「「火山脈」第一号について」『火山脈』第五〇号、一九六〇年一月、一頁を参照。なお、『炭炎』を発行していた三菱美唄炭鉱の文学サークルも、新日本文学会美唄支部よりスタートした。中西茂氏への聞き取りより（二〇〇七年一二月二七日）。

＊15　小日向氏への聞き取りより（二〇〇六年九月二六日）。

＊16　一九五四年四月に再び分裂が生じ、右派の全炭鉱（全国石炭鉱業労働組合）が発足した。なお全炭鉱は、ほぼ同時期に設立された右派のナショナルセンターである全労会議（全日本労働組合会議）に参加している。

＊17　石炭産業におけるレッド・パージによる解雇者の総数は二一

四八人以上で、電産につぐ多数を占めた。三宅明正『レッド・パージとは何か――日本占領の影』大月書店、一九九四年、八五頁。

＊18　うたごえ運動については、『知性』増刊号、一九五六年四月、藤本洋『うたは闘いとともに――うたごえの歩み』株式会社音楽センター、一九八〇年などを参照。

＊19　雄別炭鉱では、『火山脈』の責任者関谷文雄がレッド・パージにより解雇された。「火山脈並に雄別における文化活動の推移」『火山脈』第五〇号、一九六〇年一月。また、太平洋炭鉱では太平洋文学会が主要メンバーの解雇によって解散を余儀なくされている。「パージで解散――太平洋文学会」『響土』第一〇号、一九五五年一一月。三菱上山田炭鉱では、リーダーの解雇によって文芸誌『樹影』、『地軸』が廃刊になった。前掲森田『この勝利ひびけとどろけ――荒木栄の生涯』。

＊20　「労働者文学への期待――炭道文学一〇号記念座談会」『炭道文学』第一〇号、一九六二年五月。

＊21　また、「私たちの文化活動の発展のために――総評教文研究集会報告より」『月刊総評』一九五八年五月。

＊22　強力道信氏への聞き取りより（二〇〇六年八月一八日）。

＊23　前掲藤本洋『うたは闘いとともに――うたごえの歩み』、六〇頁。

＊24　六〇年代になると、共産党系の中央合唱団に対して社会党系の日本音楽協議会が結成されるなど、平和運動等と等しく、サークル運動にも分裂が生じた。こうした風潮は、労働組合運動の分裂にも連動していたようである。聞き取りによれば、六〇年代以降多くの炭鉱の労働組合で共産党系の組合員を排除しようとする傾向が顕著に強まった。

＊25　第二四号から『炭労』に、第五六号より『月刊炭労』に、名称が変更された。

＊26　第五三号における転換については、西影時男「発刊当時のことなど」『月刊炭労』第一〇〇号、一九五八年一〇・一一月、八四―八九頁を参照。

＊27　『山田文学』は、三菱上山田、日炭山田、筑紫、木城の炭鉱労働者を中心に地域で組織されていたサークルの機関誌である。

＊28　「炭鉱の生活史」編纂委員会「三菱美唄「炭鉱の生活史」はこうした書かれた」『月刊炭労』第七〇号、一九五六年三月。『炭鉱の生活史』は第六集まで発行され、一九六〇年には岩波新書より三菱美唄炭鉱労働組合編『炭鉱に生きる――炭鉱労働者の生活史』が刊行された。

＊29　「うたごえよ世界にひびけ」『炭労新聞』一九五五年一二月一日、二頁。

＊30　横山照雄「中鶴青空コーラス生い立ちの記」『月刊炭労』六四号、一九五五年九月など。

＊31　高山貞章「炭鉱の文化運動について（一）――主として夕張地区諸炭鉱での経験から」『月刊炭労』第七八号、一九五六年一一月号。

＊32　なお、先に挙げた文学サークル誌の相次ぐ刊行も、全国的な動きと無縁ではない。林尚男は「戦後後半期のサークル運動

――一九五〇年以後の民衆文学運動の覚書」において、一九五三年後頃より、職場（炭鉱に限らない）において文学サークル運動が活発化し始めたと述べている。国分一太郎・野間宏編『文学サークル――その発展のために』理論社、一九五六年、三〇―三一頁。

＊33　炭労教育宣伝部「われわれの教宣・文化活動はどのように行われているか――「教育宣伝活動調査」より」『月刊炭労』第六七号（五五年一二月）、第六九号（五六年二月）。調査の母体は、支部数二〇〇、回答数は四四、回収率二二パーセントとなっている。本調査によれば、全般に、サークル運動は九州よりも北海道において活発であったようである。

＊34　『月刊炭労』第六七号、五五年一二月、六七頁。

＊35　草笛健作「第二回文学サークル代表者会議報告」『あしおと』第三号、一九五八年四月。なお、『あしおと』は九州採炭の文学サークル誌。

＊36　炭労教宣部「われわれの教宣・文化活動はどのように行われているか（下）」『月刊炭労』第六九号、五六年二月。なお、会社が厚生費を支出している場合、通常生産量に比例して厚生費が支払われたようである（たとえば太立洋炭鉱では一トンにつき一〇円）。

＊37　前掲拙稿「一九五〇年代後半のサークル運動と小集団論」。また、前掲の炭労本部の報告でも、サークルと労働組合の間の深刻な軋轢が取り上げられている。「私たちの文化活動の発展のために――総評教文研究集会報告より」『月刊総評』一九五八年五月。

＊38　村田久氏への聞き取りより。

（みずたまり　まゆみ・北海道大学大学院文学研究科准教授）